

長い手紙 (第三回)

本多篤史

XIII 近景・遠景

腰の曲がったおばあさんと、腰の伸びたおじいさんと一緒に、橋を渡った先の停留所で私はバスを降りた。知らないうちに乗車賃がどんだん上がっていたらしく、支払いのときに少しどぎまぎしてしまった。早速バスの中から少し見えていた教会に向かうことにした私は、ふと橋の下の景色に目を留めた。つきり川が流れているものと思っていた橋の下には小さな集落があった。ほとんどの家屋がおそらく平屋建てで、トタンの青と瓦の赤茶けた色、焦げたような木の茶色、それぞれが立体的に組み合わさってごくごく自然な家波を作っていた。ごく一般的な一軒家サイズの教会は集落の中ではなくて、それを見下ろすような少し小高いところに建っていた。駐車場と掲示板、観光案内板、木の引き戸、下駄箱、小さな窓。建物には最小限の教会風な裝飾が施してあった。外壁は不思議なくらい、光るように白い。佇まいはとりあえず合格だな。なんというか、そう、「宿題」にとりかかるとにはもってこいの外観だ。ここまではとても良かった。だが、だがしかし、この後がまずかったのだ。靴を脱いでちゃんと下駄

箱へしまい、(スリッパが二足置いてあった)入り口へ向かう。ちよつと心配だったけれど、塗装のはがれかかった引き戸は案外簡単に開いた。いや、開いてしまった。一体全体何のお導きか、私は開けなくてもすんだはずの、運命の扉を開けてしまったのだ。「あっ」と声が出そうになるのを私はやつのところまでこらえた。とても、すごく、きれいなのだ。

外観に似つかわしくないかなりしっかりした四本の柱の間にこじんまりとした、古い木の長机が整然と並んでいる。けばだった赤い絨毯も、ニスのすつかりはがれた机と椅子も、やけたカバーのかかった電子オルガンも、献金箱も、長い間一緒に陽にさらされて、くっついてしまったみたいに調和していた。海岸からは離れているから、海のきらめきは届いてはいないけれど、代わりにその予感が部屋いっぱいに充滿していた。奥には小さな祭壇がちゃんとあって、こんなところでもイエス様は人類の罪を償っていた。なんとなく敬虔な気持ちになって一番後ろの椅子に腰掛けてじっとイエス様をみつめてみる。うん、なんだかおかしいぞ。ちつとも宿題をやれそうにないじゃないか。「信仰のすがたについて」なんて自分で宿題のテーマを決めてはみたものの、私の頭にはとりあえずこの瞬間何の閃きもおきなかった。それどころか、まるでくもの巣がいつぱい張ったみたいに、私の頭のなかは密に、真っ白になってしまった。なんだかまるで実感がわかない。

私がつい数百時間前まで働いていた場所とこの静かな教会が同じ国の中にあること、机の上にはパソコンも何も無くて、その中にはただいくつかの黄色くなった聖歌集があること、私一人に見られながらイエス様がおし黙っていること、小さな窓から午後の光が差し込んで、柔らかな陰影を机や赤い絨毯に置いていくこと、その全てを素直に受け入れることができなかった。そんな場所に私が今座っていることがなんだかあつてはならないことの様なきがしたので。私は混乱しているのかもしれない。必死に何かを考えようとして、私はトオル君の手紙の言葉を思い出す。

「そこには素朴な信仰のすがたが確かにありました」

これが素朴な信仰の姿なのだろうか。だとすると私は、素朴さを勘違いしていたのだろうか。素朴という言葉に、心にしっくりとなじんで思わず微笑んでしまうような、そういうものを私は期待していた。私の心の中で消えていきそうな不確かなトオル君を、固定するためのささやかな何かがあるかもしれない。でも現実の教会の中は、あまりにもドラマチックな、一つの美しい風景だった。私の思い出は残念ながらこんなにドラマチックではないよ、脚色はよしてくれよ。大げさだけれどなんだか少し裏切られたような気がしてとても宿題には取り組めないの、ひとまず外に出てみることにした。なににせよ、焦ってやる

べきことなんか、ただの一つもないのだ。

外に出て、入るときにはよく読まなかった案内板を読んでみた。どうやら小道を下ったところに、この教会を作った神父様の記念館があるようだ。民家や畑の間を通るのは少し緊張するなあ、と思いつつも、手持ち無沙汰に私はそこへ行ってみることに決めた。ああ、それにしてもびっくりした。あまりにもドラマチックな出来事を前にすると、乙女の中のリアリズムが目覚ますのだよ、わかってないなあ、トオル君。

XIV 手紙

僕は礼拝堂のちょうど真ん中あたりに腰掛けて、机の中にみつけた冊子をとりだしてみた。たった五ページぐらいのそれは教会の機関紙のようなもので、書いてある内容やイベントについてはよく理解できなかった。そこに書かれていた1997年3月号という文字に目を留めて、僕は勝手に冊子を取り替える神父さんの姿を想像する。きつとお決まりの黒いガウンなんか着ていなくて、チノパンにジャンパーを羽織っているだろう。頭ははげかかっっていて、いかにも日本人の中年男性といった体形をしている。毎日決まった時間に入り口の南京錠を開けて、夏場なら全ての窓を半分ずつ開いていく。それから掃除機をかける。毎月大体決まった日には机の中の

機関紙をひとつずつとりかえて、ぼろぼろになった聖歌集を見つけたときはついでもそれも新しいものとりかえる。冊子をばらばらとめくるのにも飽きてきたところで、今度は目を閉じて机に伏してみた。何も考えることができない。ただ真つ暗な視界の遠くの方に、ごくごく小さな、浮かぶ船の灯のような高揚があるだけだった。それはこちらに近づいて来ることなく、偶然のゆらめきを繰り返しているだけだ。僕はその正体を探ろうとした。数学の問題を解くときのように、到達不可能に見える結論に向かつて、仮定と事実を丹念に積み上げていく。この高揚の正体はなんだろう。僕にはおそろく縁もゆかりもなさそうな、外国からやってきた一人の神父が作り上げたこの礼拝堂に、生まれた街の一部であるとはいえ、十八年以上存在すらも知らなかったこの場所に、誰ともなく、ただ一人で座って目を閉じている僕の、この高揚の正体はなんだろう。目を閉じたまま自分を取り囲む空間を可能な限り頭の中に思い描いてみる。ささくれ立った木の椅子の上、赤い絨毯の上、海へ向かう斜面の上に僕は今座っている。建物に似つかわしくない太い四本の柱。壁にかけられた色あせた宗教画（これは恐らく印刷だろう）。電子オルガン、聖母マリア、献金箱、窓の外の緑、低い木、家々、海。三月の陽射しがそれを照らして、光と影を作っている。そしておそらくこの瞬間、僕の半径一キロメートル以内で何人かの人

の成分を失って黄色い色をしていた。誰もがこの陽を見たのだろうか。石器時代の人間も、貧しい漁民も、迫害を受け続けた人々も、遠くなつたふるさとを水平線の先に夢見た神父も、この黄色い陽を見たのだろうか。彼らは一体どんな気持ちを抱いて、どんな風に名づけたのだろうか。一つ一つの受け継がれる思いを、人は信仰という名で呼んだのだろうか。遠く年月は過ぎ去って、暮らしても少しずつ豊かになって、人とも私たちはだんだんと近くなる。そして一つ一つの思いも、気付かないうちに同じ年月を経たものたちとだんだん近くなる。遠かつた祈るべきものを人の手が大事そうに拾い上げたとき、「素朴な信仰」ははじまるのだ。通りすがりの人には決してわからない信仰のすがたが僕には見える。それはきっと、この街で僕が生きていく理由になる。

佳奈さん、あなたならわかってくれるでしょうか。僕には自身がありません。

XV 答え（ソーメンと井戸）

途中で会った飼い犬に「ごめんください」と挨拶をして、どうか人とすれ違いませんようにと願いながら私は坂を下った。国道を通る車が絶対に気づかないであろう場所にその小さな記念館があった。20畳ほどのスペースにだいたい明治

は働いている。今日の献立を悩んでいるかもしれないし、テレビを見て笑っているかもしれない。僕はそのまま、目を閉じたまま白い漆喰の壁と、キリストの左にたたずむマリアの頬の白さを比べてみる。マリアの頬の方が丸く艶があるようだ。人間が一人、礼拝堂の真ん中にいる。いくつもの時を経たものたちに囲まれて、いつも変わっていく人間が一人座っている。人間はこのままものたちの一つになりたいと、本当は思っている。このまま陽を受けて、雨の音を聞いて、汗を流し、寒さに震え、海風を受けて、そうしていれば、不思議な親和力で結ばれたものたちの一つになればはしないかと思う。年月は確かに、人ともものたちを近づけるのだろうか。

ふつと目を見開いた僕は、高揚の正体がなんとなく分かったような気がした。それは懂れであるし、同情であるし、感嘆でもあるし、つまり一つの生き物のようなものだった。例えば動物の分類は、身体的特徴も、行動的特徴も、結局他の生き物との比較でしか語られない。一人の人間の感情もおそらくそういうものなのだろう。あなたは、他のよりも耳がすぐく大きいわね、それならあなたは、苦しみな。あなたはとても足が速いし、強い牙を持っているわ、あなたはそうね、喜びね。そんな風にして僕のなかでも一分一秒ごとに名づけが行われている。

いつの間にか陽が傾いていて、白かった太陽光はいくつか頃の偉い神父さんにつわわる品が並べられていた。どうやら彼はとんでもないスーパーマンだったらしく、さっきの教会をはじめとした建築・土木から漁業・農業指導など、多岐にわたって当時の漁民達の生活を支えていたらしい。彼が製法を伝えたといわれるソーメンが今でもこの地域には残っているそうだ。ソーメン、うん、季節的にまだ少し早いかな、やめておこう。こうして食べ物のことばかり考えている私は二十代で日本へやってきて、以来一度も祖国の地を踏むことなく死んでいった彼に素直に謝りたい。もうすぐ三十なのに仕事もせずに、毎日実家の両親の頭の上で暮らしてごめんなさい。出掛けに観光客用のノートを出掛けにばらばらとめくってみる。ほとんどが県内や九州の他県からのお客さんばかりだった。うむ、ここはコメントを差し控えておこう。三才が現実逃避に地の果てまでやってきたとあつては皆さん失笑ものだろうから。外に出て、陽が傾いてきていたことに気づいた。早く宿題をまとめないとパンフレットにのつていたすごい夕日を見られなくなってしまうので、来た道を一旦教会まで戻ることにした。途中に、坂をおりるときには気づかなかつたふたがされた井戸があつて、そのそばに小さなマリアがいた。井戸端のマリアとはいかがなものかと思つたけれど、湿り気を帯びた濃い土と草の色の中に見る真つ白な、マリアはなんだかかわいくて子供みたいだった。

今度は氣を引き締めて教会の椅子に座った私は、かばんの中から便箋と封筒を取り出した。陽が傾いてきたせいとか、教会の中は先ほどよりもいくらか明るく乾燥してみえた。さあ、いよいよ宿題にとりかかるのだ。考えに考えたあげく今回私が自分に課した課題は「トオル君に返事をかくこと」だった。ただの一度も手紙の返事を書くことがなかった、結局お葬式にすら出席できなかった私の十年遅れのお返事を、トオル君の育った街で書くことに今さら意味はないと思う。でも、とにかく私はやるんだ。ボールペンを握った私は預言者のように力強く書き出す。「宿題その一、信仰のすがたとは」「答え、ソーメンと井戸」

XVI 手紙

宿題その一、信仰のすがたとは。答え、ソーメンと井戸。

トオル君、お久しぶりです。私は今あなたの生まれた街にいます。道中で会った人々はとても静かで、上品な感じでした。バスは海の傍を突か離れず走って、とうとう私をこの教会まで連れてきました。とてもとても、いい街だと思います。といつてもあなたはもうずっと前からここにはいないけれど、返事がとてもとても送ってしまったことをまずはお詫びします。あの頃の私にはとても文書で丁寧にお返事する自信がな

かったもので。

さて、宿題の答え、右に記したものでどうでしょうか。ご心配なく、もちろん解説はいたしません。まず、私は問題を二つに分けました。まずひとつは、あなたの言うところの「信仰」という言葉の解釈です。その答えは道中の団地にありました。ずばり言ってしまうと、それは「生活」のことです。信仰は特別なものでも、高貴なものでも、妄信的なものでもありませんでした。たくさん細い糸を織っていくように、自分とその周りの人々の生活を組み合わせていくこと。たくさん長い糸の間を抜けて生きていくこと。それに向かう人々の真摯な気持ちをあなたはきつと信仰と呼んだのでしよう。ごくごく近しいものたちを大切にすること、それが信仰だと私は考えました。

次に、その姿についてです。ごくごく近しいものたちを大切にすることが信仰だとしたら、その姿はきつと神父様が残したソーメンと、教会の下の井戸です。ソーメンはそれを目の前にしたものにだけ恵みを与えるし、井戸だつてそうです。近しいものたちを守るためにそれらがあります。ソーメンは人の手がつむいで、人の手によって茹でられるし、井戸の清水も人の手によってくまれます。地球の裏側からやってきた人間によって与えられたソーメンと井戸が、正に目の前の人間たちを喜ばせたとき、神父様はおそらく全能の神へ祈った

ことでしょうか。そして漁民たちは、ソーメンと井戸に祈ったことでしょうか。

ソーメンと井戸、これが私の答えです。教会はとてもよかったですよ。でも私には素朴さの正体がわからないんだ。どうしてだろう。トオル君に聞いてもきつと笑ってごまかすだろうから、もうすこし一人で頑張ります。あと、二つ目の宿題はまだ考え中です。それでは、また。

XVII 奇跡

奇跡みたいな物語が好きだ。幻想ではなくて、現実でもなくて、ごくごく普通の世の中で暮らしているごくごく普通の人達に信じられないような奇跡が起こって、誠実な人達や優しい人達が涙を流すような、そんな物語が好きだ。そしてときどき空想するのが、その奇跡の一夜（仮に一夜としておく）が過ぎ去ったあとの彼ら、彼女らの生き方だ。二度と起こりほしくないから奇跡なのであって、だからきつとその後は何も変わらない平凡な毎日を過ごしていくのだろう。七時半に起きて、仕事に一喜一憂して、家族や人間関係で悩んで、ときどきは通りのカフェでコーヒーを飲んで。いつか「奇跡のあと」という小説を書いてみようかと思うぐらいこの空想は楽しい。特にふとした瞬間にあの奇跡の一夜を思い出すそのときの感情を作り上げるときは、おそらくとんでもなく

やついた顔をしているに違いない。鏡で見てみたことはないけれど。

落ちていく夕日を見ながら私はこんな関係ないことを考えていた。眼前はまたしても、ドラマチックだ。背景だけならさっきの教会も今も、パーフェクトととってもいい。崖の上の展望台から、いくつかの小さな島が浮かぶ水平線が見える。雲はひとつもなく、夕日は思う存分自らの色を周りの全てに分け与えている。全部、オレンジだ。この夕日にかかつては、空と海が本当に巨大なキャンバスに見えてしまう。ただ、キャストと筋書きがよろしくない。生まれてはじめてのこんな風景に、せめて一人だったらもつと浸れただろう。しかし、あろうことか今私は三人の素敵なおば様方と一緒に、ベンチに座って夕日を眺めているのだ。展望台が道の駅になっていて、比較的人が多かったためか、珍客の私は来るや否やおば様方の親切をたまわったのである。

「すごいわねえ」

「ほんとに、この夕日は日本一よ」

「すごいですね、ほんとに」

こういう似たような会話をさっきから何度か繰り返しては、黙る。うむ、素敵な奇跡の起こる余地がない。おば様の一人がこの辺の海について教えてくれた。どうやら角力灘という名前らしい。いわく、小さな岩とも呼べる島が点在していて、海岸を走っているとそれがくっついいたり離れたり、まるで相撲をとっているように見えるそうだ。そうかそうかと感心し

ながらもう一度水平線へ目を向けても、さつきより低くなつて海へ落ちようとしている真つ赤な夕日に向かって私は「きれいだ」とつぶやくことしかできなかった。佐倉さん、山口さん、中浦さんという名のおば様方は三人が三様に皆きれいだったのだけれど、中でも一番長身の、黒く長い髪が印象的な中浦さんは抜群の美人だった。年齢はもう四十をとうに過ぎているのだから、プロポーションは二十代の、それもおかなりきれいな子たちに全くひけをとらなかった。そしておしゃれだ。自然な長い黒髪、色味は少ないけれどよく観るととても気を遣っているのがわかるメイク、開襟の白いシャツと細く黒いパンツ、華奢な時計、指輪、どれをとつてみても健康に健全に年を経た人のものだった。すごく、うらやましい。私も自慢じゃないがそれなりに男の子にはもてたし、精一杯謙遜してそこそこの容姿だと思う。(乙女は誰だつて自家家なのです)けれど夕日をバックにこんなに素敵の人を見せられて、私の砂の城はさらさらと音もなく消え去ってしまった。まず始めに話しかけてくれたのがこの中浦さんだった。

「あなたお一人？」

というこれまた若すぎない張つた艶のある声に私は小動物のように素早く振り向いてしまつて、おば様方に笑われてしまった。

「はい、そうです」

とその魅力的な声に抵抗する術をなくした私が素直に答えると

「以前この街で友人が亡くなったもので、その弔いというかなんというか、あ、お墓の場所なんでもちろんわからないですけど、うん」

というなんともマヌケな返事になってしまった。

「あら、そうなの、それはそれは」

「あらまあ、あ、そうだわ、あなたお名前は何？」

「あ、伊東です。伊東佳奈といいます。」

車は走り出して二つ目の信号を過ぎたあたりだったろうか。この瞬間、全く予期していなかった奇跡が。恩恵が私の身に降り注いだ。ああ、神様、こんな私のことも見てくれていてありがとう。でもどうせ奇跡を起こすなら今日はたくさんチャンスがあったはずなのに、何も国道を走る乗用車の後部座席を選ばなくても。

「ちよつと待って、あなたもしかして、佐々木、佐々木トオルのご友人？」

さつきからしかめつつらをした眉間がバックミラーに写っていた中浦さんが少し大きな声でそう言うのと、私は電撃を受けたように、文字通り座席から飛び上がった。

「え、そ、そうです！あ、でも、同姓同名かもしれないけど」

「十年ぐらい前に交通事故で死んだ佐々木トオルよ？そうでしょう？」

「はい、そうです！でもどうして？」

「す、ごいわね、こんなことってあるのね、私はあの子の母の妹、おばさんよ。」

「あら、そうなの、めずらしいわね。どこからいらしたの？」

と、いった感じであれよあれよという間にご一緒させていただくことになったのだ。これもまあ旅の醍醐味だと思つて、気の利かない私は特に話題を供することなく黙つたまま、三人のおば様方ともうおでこだけになってしまった夕日を見つめている。燃えるように赤いとよく言うけれど、このオレンジは真冬に消えかけの炭の中をのぞいて、息を吹きかけたときの色に似ている。もちろん夕日はそんな緊張感と全く違つた放埒さを身に着けているけれど。再び中浦さんの麗らかな声を私の耳がとらえた。

「そういえばあなた、お車？」

「いえ、バスで」

あらあ、大変だったわねえとお三方が声をそろえた。

「もし市内の方へ行くのだったら私たちの車に乗っていきませんか？」

その誘いをもちろん断るはずもなく、少し軽い足取りで私たちは中浦さんの車へむかった。スポーツタイプのスバル・レガシー、黒。うんうん、美人はなんに乗っていてもかっこいいものだ。四人とも車に乗り込み(私は運転席の真後ろになった)、エンジンのかかったところで今度は先ほど角力灘という名前を覚えてくれた佐倉さんが

「あなたはどうして長崎まで？」

と、急に核心を突いてきた。まさか初恋の相手を追つてともいえず、

「あ、もちろん、それもあるんですけど、でもどうして私の名前を聞いてわかつたんですか？」

「あなた宛の手紙、いくつか私が預かっているものがあるの。彼の形見分けだね。」

まさに、奇跡。私は危うく涙を流すところだった。それは探し物をしていて、なくしたことすら忘れていた別のもの、それもすごく大事にしていたものを見つけたときの感動に似ていた。

「あなた、明日は一日お暇？」

「はい」

搾り出すようにそう答えると、私はとうとう泣いてしまった。だって、泣くしかないだろう。十年前にいなくなつてしまつたトオル君と、私の知らないところで強く関わり合つた人間が今目の前にいるだなんて。なんて、なんて悲しいんだ。トオル君、あなたは何でもう、この世にいないんだ。

しかしそこは私も大人、十年間の経験から、人前で涙なんか見せない根性ぐらゐは身に着けた。すぐに涙を抑えて外を見ると、いなくなつた太陽がまだ空と海の端を、今度は揺るがないキャンデルの火のように照らしていた。ああ、やつぱり、きれいだ。

〈続く〉